

福沢研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第 8 号 2008年 3 月31日 発行

目 次

* 福沢研究センター連続講演について		* 主な新収資料	9
中村 勝己	2	* 主な動き	10
* 着任にあたって 都倉 武之	3	* 福沢研究センター諸記録	11
* 秋学期シンポジウム概要	4	* スタッフ一覧	12



幅 40mm × 高さ 80mm

* 白磁の西洋人形 *

福沢研究センター通信の表紙では、これまで福沢諭吉が海外で購入してきた品々を紹介してきた。本号はそのしめくりである。書籍を除いても、福沢が2度の渡米および約1年にわたる訪欧で購入したものは多々あると思うが、残念ながら明らかなものは数少ない。この白磁の西洋人形は、父諭吉のゆかりの品として三女俊が所蔵していたものである。福沢の渡米・渡欧時に女兒はまだ生まれていないので、日本で購入したものかもしれない。渡欧当時新婚だった妻への土産と想像すれば、せめてもの罪ほろぼしのおもしろい。



「福沢研究センター連続講演について」

なか むら かつ み
中 村 勝 己

(福沢研究センター顧問・名誉教授)

1987・88年度に福沢研究センターが主催した連続講演について、発案者・主催者として訴えたかったこと、何故そのような企画をおこなったのかを、説明するようにとの依頼を受けた。この機会にこの置土産の趣旨を説明しておこうと思う。

この連続講演の構想は、『近代文化の構造』(筑摩書房、1972年；のちの講談社学術文庫版、1995年)が、その原型をなすものである。同書は、矢内原忠雄先生の夜間課外講座今井館聖書講義を念頭に置いたものであり、この講座は様々な職業をもち、年齢や学歴も様々な数十名の勤労者の聴講者を対象とし、R・H・トーニーの『宗教と資本主義の興隆』の無教会版であった。この『近代文化の構造』は、拙編著『経済的合理性を超えて』(みすず書房、1988年)に発展した。『経済的合理性を超えて』は広く読まれたし、反響もそれなりに大きかった。次いで福沢研究センター連続講演「日本近代思想史研究の方法」(1987年度)・「続日本近代思想史研究の方法」(1988年度)の講演集『受容と変容—日本近代の経済と思想』(みすず書房、1989年)および『マックス・ヴェーバーと日本』(みすず書房、1990年)を上梓することが出来た。この三冊は、編者中村の義塾在職の最終年度前後の作品で、義塾への「公的置土産」であった。また、編者中村定年退職後に自費出版した三部作、すなわち経済学部専門課程の特殊講義を基とした『近代市民社会論』(個人書店)、次いで大学院経済学研究科の講義を整理した『近代市民社会論』(タウン・ニュース社、2004年)、そして公開講演集『現代とはどういう時代か』(江ノ電沿線新聞社、2005年)、が上梓された。これらの著作は、厳密な意味の経済史学の著作と並行しているものだが、できれば上記連続講演集と関連したものとして、ともに併読していただきたいと思っている。これらは著者の渾身の作品である。

1972年春、私は米国留学中の一日をついやして、ボストンからバスに乗って、ニューイングランドのロード・アイランド州プロヴィデンスを訪れた。この町は大学所在地で、急な坂をのぼって行くと三田の旧図書館の八角塔に極めてよく似た赤煉瓦の建物があり、慶應関係者ならば、そして多分旧図書館の設計者も、又義塾出身者ならずとも直ちにそれが慶應義塾の旧図書館の建物の原型ではなかったかと識別できるのである。この大学は『学問のすゝめ』や『文明論之概略』に影響を与えたフ

ランシス・ウェーランドの母校であった。福沢思想の一つの原点としてのウェーランド、慶應義塾、そして福沢研究センターの連続講演。この三者の関連性を思い浮かべていただきたいと思います。

ところで、「公的置土産」を遺したことの背景には、私の義塾での体験があった。戦時中塾生として在学した者にとっては、塾の生活は必ずしも愉快的なことばかりではなかったし、先生方にとってもそうだったと思えるが、それでも当時学生・生徒だった者にとって忘れたいこともいくつかあった。時代の右翼的・軍国主義的傾向にはっきり否という態度をとられた方々がおられたし、少なくとも時勢について行けない学生生徒をそれとなくかばってくれた方々が何人もおられた。そういう先生をかかえている義塾が軍部やその筋からは「福沢の学校」と目された所以でもあった。そういう権力のいわば隙間をつくってくれた人々がおられたことは戦時中の卒業生の記録を見れば一目瞭然である。無名の学徒の苦悩の記録はいくつか出版されているが、出版されなかったが、読者側の心さえあれば、十二分に読みとれるものがあった。学徒出身者の中で義塾出身者は、軍隊生活の中で、その言動や生活態度で何となく、又はハッキリと、それとわかるものであった。このことは証言しておく必要がある。義塾出身者がすべてそうであったとは言いつもりはないが、そういう者があったことはとうてい否定しきれない。

近代日本における慶應義塾の役割について人目につく指導的人物、たとえばいわゆる財閥の指導者ではないが、地方の財界や自由民権運動の活動家や教育に生涯をささげた人物もおられるであろうし、日本人の評価基準からは洩れてしまうような人物がおられた。そういう人物も、大事な人物なのである。そういう人たちにとって、三田の八角塔は、彼等の目ざした「近代」の象徴であり得たかもしれないのである。センターの連続講演は、そのようなことを考えてもらいたいと企画したものであった。



着任にあたって

とくら たけ ゆき
都 倉 武 之

(福沢研究センター専任講師)

昨年10月、慶應義塾福沢研究センターに着任させて頂きました。義塾に学び、福沢研究を学部卒業論文以来の研究テーマに選んだ私としてはこの上ない光栄であり、また石河幹明以来綿々と義塾が培ってきた福沢研究及び塾史編纂の伝統に連なる組織に身を置くことに大きな喜びを感じます。

「福沢研究」が、近代史研究の一分野をなしていることは今さらいうまでもなく、それゆえに近代日本全体を射程とする当センターが社会に対して担うべき役割は、福沢を常に今日の問題たらしめることにあろうかと思えます。

義塾内に限定して考えてみても、福沢及び塾史は、単に自らが身を置き、また身を置いた学校の創立者とその学校の歩み来た歴史という以上の重みを直接間接に塾生塾員に与えてきたことは疑いようがありません。義塾が今日在る意義を意識するとき、その使命を社中で共有する前提としての福沢という存在は、今後も将来にわたって必ず向き合わねばならないものであり続けます。

私自身の福沢研究に対する気持ちは、昭和25年に小泉信三が、福沢先生研究会の機関誌『福沢研究』に寄せた次の言を否定することが出来ません。

「福沢研究上において他人にはなくて吾々の独り専らにする特権は、吾々の〔福沢〕先生に対する Piety である。これあるによって、吾々は独り愛するもののみが有する直覚と不撓心とをもって先生を知ることが出来る。」(「福沢研究の方向性について」『小泉信三全集』第21巻)

小泉はこれに、次のように続けています。

「けれども特権は同時にハンデキャップである。吾々の先生に対する Piety は能く吾々をして先生の本質を直感せしめると共に、また往々吾々をして先生に対して盲目たらしめる。吾々は吾々の Piety について正当に自負すると共に、またそれに対して常に自ら戒めるところがなくではなるまい。」

そしてこれを「善良にして世間見ずなる孝行息子はただわが父のみを見る」と表現し、「学界の孝行息子」となることを厳に戒めています。

この両者のバランスに意を用いながら、当センターの果たすべき任は今後、いよいよ重くなっていくように思われます。

福沢研究センターが設置されたのは義塾創立125年、本年義塾は創立150年を迎えました。センターが歩んだ

この25年は、福沢諭吉を直接知る人が誰一人いないはじめての四半世紀であるという意味において、今までと大きく異なるものでした。

福沢との距離が確実に離れつつあることは、塾内の随所で感じるところであります。私が学部生の時に受けた講義を思い返してみますと、半ばアリバイのようであり、福沢に言及されることが多かったような記憶がありますが、わずか10年の間に、そのようなアリバイを強いる雰囲気さえも義塾からは薄れてしまいました。義塾刊行物などでの福沢への言及も、近年は多分にご挨拶的で、手頃な種本の再生産が繰り返行われているように感じられます。そういった中に登場する福沢は中国の故事を聞くように現実感を失い、塾生はそれに対して異質なものを敏感に嗅ぎ取って、自分とは無関係のものとして度外視するようになります。このサイクルは既に確実に義塾の中に根付いてしまっているかに思われます。

しかもそういった場合に選ばれる福沢への「ご挨拶」でさえ、かなりの頻度で福沢研究センターに確認が任されていることは、一層憂慮すべきことです。実感をもって福沢を語ることが出来なくなった150年目の義塾という現実、直視されるべきことと思います。センターが、義塾を義塾たらしめる最後の砦になってしまったならば、その設立は失敗に帰したことになるってしまうと思うのです。

前述のように小泉信三が書いたときの塾生と福沢の時間的距離は、今我々が小泉に対して抱くそれと同程度のものであったように思われます。福沢の実在感が、ただ遠のく一方の将来にわたって、社会の中の福沢及び義塾と、義塾にとっての福沢を、常に今日の問題たらしめていくという重い任が当センターに課せられていると思っております。

福沢に対する度し難い piety と「孝行息子」とならぬようにとの自戒と。この二つの一見矛盾する表裏一体の福沢研究センターの自己認識が響き合う中に、広く外に向けては福沢研究が社会の中で、世界史の中で、正しく位置を定め、また内において義塾が福沢をバックボーンとして社会の先導者たらんとする気概を持ち続けていくことが可能となるものと信じます。私も微力ながらその魅力あふれる任の一翼を担っていきたいと考えております。なにとぞ、ご指導ご鞭撻のほどをお願い申し上げます。

2007年度秋学期 福沢研究センターシンポジウム

「海をわたる『福翁自伝』 —翻訳から考える福沢諭吉—

いわ たに じゅう ろう
岩 谷 十 郎

(福沢研究センター副所長・法学部教授)



講演中の岩谷十郎氏

趣旨説明

『福翁自伝』—1897（明治30）年から翌年にかけて口述文体で筆記された福沢の半生は、その後世を超えて今日まで多くの日本人に読み継がれてきた。慶應義塾では特にこの『自伝』が、久しく一貫校入学・卒業に際しての記念品として

塾生・塾員（卒業生）に配付されている。「福沢研究は『福翁自伝』に始まり『福翁自伝』に終わる」とは富田正文氏の言葉であるが、慶應に学ぶ者・学んだ者にはその創設者の語る言葉を手許に置き、手軽に気軽に親しむ環境が用意されている。2006（平成18）年には、河北展生・佐志傳編『福翁自伝の研究』が慶應義塾大学出版会から上梓され、上・下巻併せて約800頁に及ぶ同『自伝』の書誌的研究として現在望み得る最も詳細かつ信頼のおける業績が著された。福沢の記憶は絶えることなく更新され続けているのである。

ところでその『福翁自伝』は近年、さまざまな言語へと翻訳が進められ、今や外国の読者はこれを異なる視点からの新しい解釈の下に再読し始めている。『福翁自伝』が初めて外国語に翻訳され海を渡ったのは、1934（昭和9）年の清岡暎一氏による英訳『福翁自伝』である。この英訳本は、今日まで多くの海外の読者を獲得し、数多くの出版社で幾度も版が重ねられた。今日『福翁自伝』は、英語、フランス語、ドイツ語、オランダ語、中国語、ハングル、タガログ語、アラビア語、ベトナム語で読むことができる。また、『学問のすゝめ』には、タイ語、モンゴル語、インドネシア語訳などもあり、『文明論之概

略』に至ってはペルシャ語訳も見られる。今や福沢を、『福翁自伝』を、狭い日本語の枠の中で論じることとはもはや時代遅れになりつつあるといっても過言ではなからう。

今から110年前に発せられた福沢の言葉は、先に挙げた各国語にどのように変換されたのか。そこには当然に翻訳という作業が介在しなくてはならないが、近世日本の封建社会に生まれその桎梏に呻吟した青年期福沢の心情や、その背景となる制度・習慣・文化について、異文化の翻訳者たちはどのような苦労を経て福沢の体験や経験をそれぞれの言語に移し替えたのであろうか。今回のシンポジウムでは、アメリカ、韓国、ベトナム、フランスの各国から、現在第一線で活躍する翻訳者・研究者（クレイグ先生、林先生、ファン先生、ソシエ先生・以上発表順）を招き、福沢の文体の翻訳可能性について考えてみることにした。また、こうした翻訳版『福翁自伝』の刊行は、各国において展開される日本研究・日本学を背景として進められる福沢研究の一段階を示したものであることは言うまでもないが、それぞれの国の言葉に翻訳された『福翁自伝』はそれぞれの国の状況下で一体どのような読者層を獲得してゆくのであろうか。

2008年、慶應義塾は創立150年を迎える。その歩みの原点に福沢諭吉とその人生の「総括」を記したとされる『福翁自伝』を据えなくてはならない—ここに福沢の記憶を語り継ぐ福沢研究センターが本シンポジウムを企画した意図がある。



2007年11月2日
於：図書館旧館大会議室

『福翁自伝』：欧米人の観点

アルバート クレイグ
Albert Craig



講演中のアルバート クレイグ氏

《講師略歴》

ハーバード大学名誉教授。専門は日本近代史。1976～1987年、同大学イエンチン研究所所長。1951年来日以降、東京大学や京都大学で客員教授を歴任。当センター訪問教授（1996年）、現在、客員所員。清岡英訳本の序文を執筆。Choshu and the Meiji restoration, Harvard University Press, 1961など著書多数。この秋に Civilization and Enlightenment: the Early Thought of Fukuzawa Yukichi を出版予定。

◆英訳『福翁自伝』の質

『福翁自伝』（以下『自伝』）は他の世界的な自叙伝と比べても遜色がなく、歴史の転換期となった激動の時代が描き出されている。自叙伝の多くは青春時代の話は面白いが、人生の後半期になると途端につまらなくなってしまう。福沢は賢明にも若い頃の話しか書いていない。

『自伝』が、福沢の孫である清岡暎一氏によって初めて英訳（Autobiography of Fukuzawa Yukichi）されたのは1934年、その後1960年に加筆修正された。大戦後、この翻訳は欧米人が日本を理解するうえで大きな手助けとなり、日本研究の分野で何世代にもわたって読み親しまれた。私の知る清岡氏は流暢な英語を話す紳士であり、彼の翻訳の文体はエレガント。とはいえ、訳後70年以上が過ぎ、福沢研究が目覚ましい進展をみせていることを考えると、今や『自伝』を新たに翻訳する時期ではないかと感じている。いくつか例を挙げると、「voice」、すなわち原作は話し言葉であるのに、英訳が書き言葉になっているため生き活きとした描写が失われてしまっている箇所、訳文がともすればパラフレーズに近いという箇所、家族に関する記述が改変されている箇所、幼少期の部分で、訳に対する清岡氏の思い入れが強く意味が変わってき

てしまうような箇所がある。また、昔のことについて福沢の記憶違いや、最近の研究成果など、どれだけの情報を脚注で言及する必要があるのか、という問題。

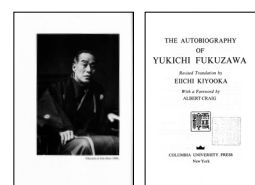
◆アメリカで『自伝』はどのように受け止められているか

私がこの自叙伝を初めて読んだのは何十年も前、大学院生の時のこと。特に大坂の適塾で学んでいた頃の記述が面白かった。強い目的意識を持ちつつ、最大限の自由を体験した大坂時代は、福沢の人生で最も幸せな時期だったのではないかと。「フリーダム」と「リパティエー」という概念に遭遇した時、福沢はこの楽しい日々を思い出したのだろうか。私は長年、日本史講座の必読書として、『自伝』を読むことを学生たちに課してきた。彼らも大坂時代の話が好きで、福沢の因習打破に好感を抱いた。が、一般的にはどうなのか。アメリカ人のほとんどは『自伝』など読んでいない。興味を持っているのは日本を理解したいと思う学者と、日本史の講座を履修している学生である。

◆歴史としての『自伝』

なぜ私が『自伝』をずっと必読書にしたのか。それは真に非凡な男の話であり、日本の変革期が鮮やかに描かれているからだ。日本人はこの変化に対応して経済を繁栄させ、活力ある「ハイブリッド文化」を構築していった。

欧米では、まず17世紀に科学革命が起き、これに直接呼応するかたちで18世紀に啓蒙主義運動が生まれた。この知的進歩の結果として産業革命が起きている。一方、日本では科学革命と産業革命は開化と同時に短期間に進んだ。日本の開化の本質は極めて重要な論題である。福沢はいち早く開化に寄与し、欧米をよく理解し、最も多く書き、また、多くの日本人に読まれた。加えて福沢は自伝を書き、自分の成長過程を描いている。手短かに言えば、私は『自伝』を開化の謎を解き明かす鍵だと位置づける。欧米の読者は19世紀半ばの革命期に日本で起きた文化的変化の内側を垣間見ることができ、実際に体験した人間の具体的かつ個人的な見解を知ることができる。臨場感があり、随所にユーモアが感じられ、まさにユニーク。



The Autobiography of Yukichi Fukuzawa / revised translation by Eiichi Kiyooka ; with a foreword by Albert Craig. New York : Columbia University Press, c2007.

ハングル訳から考える『福翁自伝』

林 宗元 (Lim Jong Won)



講演中の林 宗元氏

《講師略歴》

韓国関東大学校教授。専門は近代思想、特に福沢諭吉研究。日本研究の出発点は、太宰治研究。当センター訪問助教授(1991年)、本塾経済学部訪問教授(2007年)を歴任。福沢著作の韓国語訳として、『学問のすゝめ』(1994年初版、2007年に全面改訂新訳)、『福翁自伝』(2006年)がある。当センター客員所員。

福沢諭吉と近代

福沢諭吉はとても近代的な人である。福沢諭吉という名前からは、ただちに「近代」という言葉が連想される。福沢が『西洋事情』、『学問のすゝめ』、『文明論之概略』を発表していた明治の初期の時代の精神というものは、まさに「近代」である。

近代とは、変化を意味する言葉である。福沢諭吉におけるその変化の舞台は、はじめは日本という限られた土地に限定されるが、次第に隣国に拡散していく。

福沢諭吉の国民平等、独立自尊の思想は、近代の「時代の精神」を端的に物語っている。数多くの著作を残しているが、あいにくと韓国人に一番広く知られているものは、時事新報の社説「脱亜論」である。そのためジャーナリスト福沢諭吉というレッテルにテーマを絞る流れが、研究者たちのなかでは暗黙のうちに形成されてしまっているようである。こうした理由で、残念ながら福沢諭吉を論じる韓国人の情緒というものはさほど優しくはない。年々こういう傾向が重なりあうと、近代思想家・福沢諭吉の文名は影も形もなく、冷ややかな態度、冷たい目で見られるであろう。

今や「脱亜論」という鎖から自由に解き放たれるべき時期であり、かつ福沢諭吉を知るべき時である。願おうと願うまいと福沢諭吉は、韓国人にとって読まないわけ

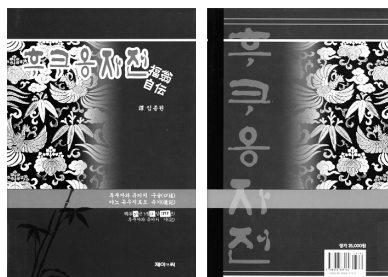
にはいかない人物であることに間違いない。これから韓日の研究者は「脱亜論」にだけ囚われず、大局的な見地からものを見、ものを考えるべきである。そうするためには、韓国の読者に福沢諭吉を薦め、読ませるようにしなければならない。私はこの人の文章に魅了されて読んだり考えたりしてきたからだ。

『福翁自伝』

私は1994年、『学問のすゝめ』のハングルの訳本を出版した。2007年夏には改めてこの本の改訂新訳を出した。『学問のすゝめ』は福沢諭吉の全著作の思想の原点(starting point)であると同時に、思想の動機(motive)を成すものだけに、この著作に私は格別な愛情を持っている。2006年2月、ハングル版の『福翁自伝』を出すやいなや、韓国の文化観光部は優秀翻訳書に選定してくれた。お陰でかなりの宣伝効果があったようである。新しい読者が幾百人も増えたであろう。

はじめに親と子との関係から自立し、そこから「文明の目標である」国家独立という巨大な命題に移っていく、その思想の展開のやり方が文字通りに超近代的である。『福翁自伝』の文章は『学問のすゝめ』とは違う。つまり繰り返し繰り返しものを呼び掛けるような形式を取っていない。学問を志す動機は、漢学と蘭学とを問わず、しごく簡単明瞭である。その簡単明瞭さに福沢諭吉の思想のキーワードが隠されている、と私には思われる。奥平菟岐の影響から逃れて江戸行きを敢行するのは明らかに藩風に逆らう。「私のために門閥制度は親の敵でござる」と深く絶望した彼が、その揺るぎない封建制を嫌悪し闘う。

訳業を通して当時の社会の仕組みとその異質の文化というものに一層近づくことができたのは、私としては大きな収穫である。『福翁自伝』に感謝する。



『福翁自伝』林宗元訳 ジェイエンシー 2006

ベトナム語訳から考える『福翁自伝』

ファン ティ トウ ジャン
Pham Thi Thu Giang

講演中のファン ティ トウ ジャン氏

《講師略歴》

ハノイ国家大学東洋学部専任講師。専門は日本仏教思想史。同大学日本語学科卒業後、東京外国語大学に留学、奈良女子大学大学院にて博士号取得。2005年、『福翁自伝』のベトナム語訳を出版。

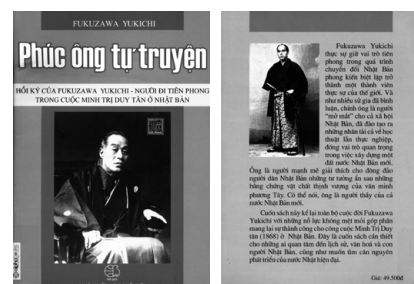
奈良女子大学の図書館で『福翁自伝』（以下『自伝』）に出会い、福沢の謙虚な語り口、自分の性癖や弱点までも開陳することに魅力を感じ、ベトナム語に翻訳しはじめたのは5年ほど前のことであった。

それまで福沢については日本の最高額紙幣の人物であり、『学問のすゝめ』のベトナム語版を読んだ程度の知識であった。ベトナムの紙幣は革命の指導者ホーチミンであるため、福沢もやはり「大政治家」であり、明治維新の指導者に違いないと勝手に考えた。ところが『自伝』を読み、翻訳するうちに福沢と維新における日本社会の印象が次第に変わってきた。『自伝』に出てくる古い文体や話し言葉を理解するのは困難だったが、まず古語を現代日本語に直してからベトナム語に訳す、つまり二重訳することを試みた。その困難を一つずつ越え、中津の家や、大阪にある中津藩蔵屋敷跡および適塾、東京の慶應義塾大学など、福沢の過ごした各地を訪ね、『自伝』の舞台や旧跡を自分の目で見ると、その価値に魅了された。

『自伝』を通じて気づいたのは、同時期のベトナムと日本とでは社会格差が非常に大きかったことだ。日本は維新まで他のアジア諸国とそれほど変わらないだろうと思っていた。政治的にはベトナムの阮王朝が1858年にフランスに侵略され、一方、徳川幕府は欧米各国の開港要

求に応じて同年に五カ国条約を締結した。その前後、日本は出島でしか外国人と接触できないが、蘭学を学び、欧米に使節団を派遣し、先端技術を積極的に導入した。幕府の政策はベトナム王朝と比べれば柔軟な対応であった。経済面ではベトナムは土農工商の影響を受けて、商業を軽視、農業が主であったが、天災が頻発したため、阮時代末には財政難に落ちたと当時の記録にある。それとは違い、江戸の経済ははるかに発達していた。経済、政治だけでなく、『自伝』から学問、交通、技術などの面を見ても日本はベトナムより発展していた。これが維新の基盤になり、現在の先進国日本につながっている。

『自伝』を通じて福沢の人生、思想の根源と形成過程が理解できる。早くから福沢の影響を受けたベトナムの潘佩珠（1867-1940）と比較すると、両者の違いや、今まで言及されていない部分が明らかとなる。福沢は潘佩珠と同じように最初は儒学生であったが、その後、熱心に欧米の学問を身に付け、先進的思想家となり、慶應義塾を起こして自らの教育方針を実践した。潘佩珠も母国の教育改革を懸命に考えていたが、当時フランスの植民地下にあって民族解放に力を尽くした。維新の成功と日露戦争の勝利によって日本への留学運動、つまり東遊運動を起こし、自身も福沢の没後4年を経て来日する。彼は欧米の書物に接することなく漢字とベトナムの文字チュノム字喃しか知らず、一生儒教の思想を研究し、人々に教えた。彼と東遊運動の義士達の敗北は当時のベトナムにおける革命の歴史的條件が未成熟であったためというのが研究者の通説になっているが、こうした潘佩珠自身の限界を深く追求していない。3年がかりの翻訳で福沢と潘佩珠の思想、日本とベトナムの近代史に対する認識は一層深まったように思う。

『Phúc ông tự truyện』Pham Thi Thu Giang 訳
ハノイ世界出版社 2005

フランスで読む『福翁自伝』

マリオン ソシエ
Marion Saucier



講演中のマリオン ソシエ氏

《講師略歴》

フランス国立東洋言語文化大学
プロフェッソルアグレジェ。専門は日本語教育および福沢諭吉を中心とした明治思想。1979～81年、横浜国立大学経済学部に留学。その後『学問のすゝめ』をきっかけに福沢研究を開始。編著として『福沢諭吉著作集 第1巻 西洋事情』（2002年）等がある。当センター客員所員。

今年の一月にパリで『福翁自伝』のフランス語版がやっと出た。それは英語やドイツ語、またはベトナム語や韓国語などへの翻訳版にずっと遅れてのことである。しかもその翻訳は、大学と関係のない翻訳家によってなされた。-

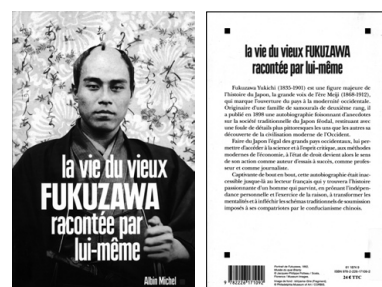
これらの事実を研究者として残念な思いで受け止めて、ではどうしてこうなったかという理由を考えてみた。やはりその一番の理由は、福沢諭吉に関する研究がフランスでは未だに十分ではないところにあるだろう。間接的に福沢に触れる研究は数多いにもかかわらず、福沢を自分の研究の中心におく人はほとんどいない。フランスの日本学界で明治時代に関する研究は近年盛んになってきているが、長年の間この時代についての研究が不十分であったことも事実である。

ところで、『福翁自伝』は翻訳しにくい作品だろうか。

福沢諭吉の文章が概して翻訳しにくいとは思えない。何よりも文体と文章のわかりやすさを目指した福沢は、外国語に容易に翻訳できる文章を書いた。つまり彼の文章は、考えがはっきり表現され、またレトリックが巧みに用いられたものなのだ。しかし『福翁自伝』だけは例外的な側面を持っている。これは福沢によって直接書かれたのではなく、彼の口述を書き取った作品なのだから。言うまでもなく、明治時代の話し言葉は21世紀の翻

訳者が苦勞するものの一つである。さらに『福翁自伝』が「自伝」であるという点にも難しさが潜んでいると思う。あらゆる自伝に共通することだが、述べられている出来事の起こった時間と、それが実際に書かれた時間との間に差があるために、作者の意識は二重の構造を持つことになる。若い頃の出来事を述べる作者が、実際には年をとってから身に付けた考えでそれを振り返っているからである。福沢も『福翁自伝』の初めの部分で父親の人生や仕事について語り、そこから当時の社会や政治を非難し、「門閥制度は親の敵でござる」という激しい表現で福沢百助の欲求不満を代弁しようとしている。だが息子の諭吉が階級制度を非難しているのに対し、父の百助が実際に不満を感じていたのは、彼が下級武士だったゆえに仕事で町人と交渉しなければならなかったことであって、階級制度そのものにはなかった。言い換えれば、福沢諭吉は幕末を非常に激しく非難することで、明治三十年代の日本人に向かって古い考え方の復興に注意を呼びかけていたのである。『福翁自伝』の心理分析がいつ読んでも新鮮に感じられることは、福沢の現代性を証明していると思う。

最後になったが、当シンポジウムの開催を通じて、福沢に関する国際交流を可能にした福沢諭吉研究センターにお礼の意を表したいと思う。



La vie du vieux Fukuzawa racontée par lui-même / Fukuzawa Yukichi ; traduit du japonais et annoté par Marie-Françoise Tellier. Paris : Albin Michel, c2007

福沢研究センター開設25年記念

- ◇記念講演会（春学期）
5月30日（金）午後1時～ 北館ホール（予定）
- ◇拡大ワークショップ（秋学期）
若い研究者の積極的なご参加をお待ちしています。
＊どちらも詳細はホームページでお知らせいたします。

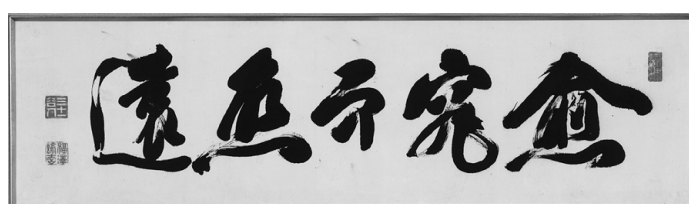
平成19（2007）年9月から20（2008）年2月までに収蔵された資料のうち、主なものを紹介する。（故人は敬称略）

福沢諭吉遺墨

■ 扁額「愈究而愈遠」 いよいよ究めていよいよ遠し

【河原田有一氏寄贈】

関防印（書幅の右上に押し、書出しの位置を知らせる）は「無我他彼此」。落款には「世俗」という文字を解体した「三十一谷人」と「福沢諭吉」（陽刻）が用いられている。富田正文の作詞で昭和16（1941）年に制定された塾歌の2番「往け涯（かぎり）なきこの道を 究めていよゝ遠くとも」はこの言葉からとられている。寄贈者の河原田氏は塾員で、二松学舎大学国際政治経済学部教授。この扁額は父君から譲り受けたもの。



福沢諭吉書簡

■ 福沢捨次郎宛福沢諭吉書簡 明治20（1887）年6月29日付

【購入】

米国留学中の次男捨次郎にあて、留学先で合流した福沢桃介のことや時事新報の発行停止などについて述べたもの。『福沢諭吉書簡集』（平成13～5年、岩波書店）所収の資料ではあるが、今まで原文の確認ができず、内容が校訂されることがなかった。

慶應義塾関係寄贈資料

今年慶應義塾は創立150年を迎え、来年初頭からは東京国立博物館表慶館をはじめとして、全国4箇所で展覧会が企画されている。周年事業の進行に伴い、昨年より塾員の方々からの慶應義塾史に関する資料のご寄贈が増加したが、当方でも積極的な収集を開始し『三田評論』平成20（2008）年1月号誌上に広告を掲載したところ、さらにたくさんのご協力を得ることができた。1月末までにご提供いただいた主な資料は、大正10（1921）年の経済学部成績証明書や昭和6（1981）～12年ごろの六大学野球の入場券、昭和15年頃の試験問題、小泉信三長男信吉と同期でやはり戦争の犠牲となられた三橋武夫の三田界限を含む喫茶店のマッチラベルのコレクション、塾生出陣壮行大音楽会のパンフレットなど出陣壮行会関係資料、戦時中の塾生の日記やノート、古い絵葉書など大変貴重なものである。

他にも10年間愛用された学生帽といった“物”の資料や明治期の幼稚舎生の制服姿、昭和18年9月の大学法学部政治学科卒業アルバムといった写真資料もご提供いただいた。政治学科のアルバムには「機関銃の如き先生の西洋政治史の御講義は思はず学生をして茫然自失たらしめる」（間崎万里先生）「先生の御講義は斯の様に明快である。そして先生の試験採点の相場も重点主義をとればAと明快に定まつて居る」（小池隆一先生）など面白い教師評も書かれている。

ご寄贈ご協力いただいた方（50音順）

石井正恵様 稲上明久様 遠藤恵子様 国立印刷局様 坂井悠治様 佐藤滋様 富澤正明様 早川喜久男様
藤澤正利様 三上英満様 三橋寿恵子様 安井裕二郎様 山中博治様



時事新報関係資料

現在福沢研究センターでは、時事新報関係の資料も収集している。最近では事務室や印刷機械室など内部の写真も含む昭和2（1927）年頃の新築社屋の写真帳や、壁新聞型の時事新報写真ニュース103枚などを購入した。

❖ 主な動き

■ 二人目の専任所員の就任

第6号でお伝えしたとおり、2007年10月1日付で専任所員（専任講師）として日本政治史専攻の都倉武之君が就任した。これにより、専任所員が2人の体制となり、業務過重による破綻の恐れが軽減した。

■ 「福沢諭吉著作翻訳出版助成」始まる

福沢研究センターへの3000万円の指定寄付を原資として「福沢諭吉著作翻訳出版助成」が始まった。この助成は、福沢の著作を外国語に翻訳する者に対して審査の上、1件200万円を上限として出版助成を行うもの。新訳ばかりでなく、必要性が認められれば再訳も対象となる。すでに、7名程の海外研究者より翻訳希望の意向が内々に寄せられている。

■ 日吉でも設置講座を開講

すでに三田では、2005年度から設置講座を開講し、2007年度には、半期6コマを提供した。2008年度には、これらの講座は、新任専任所員の就任もあり、一層充実されるが、それとともに日吉でも新たに「近代日本と福沢諭吉」を秋学期に開講する。この講義は、従来は、福沢研究センターの協力により経済学部が開講していたものだが、2008年度からはセンターの設置講座となる。

■ シンポジウム

本年度秋学期には、「海をわたる『福翁自伝』—翻訳から考える福沢諭吉—」というテーマで、韓国、ベトナム、アメリカ、フランスより4人の福沢研究者・翻訳者を招きシンポジウムを行った。福沢著作を翻訳する場合の問題点と意義につき興味深い基調報告が行われ、また、120人を越える多数の聴講者の参加を得て活発な議論が交わされた。なお、このシンポジウムの開催にあたっては、慶應義塾大学出版会よりの指定寄付も運用された。

■ セミナー

11月17日に、客員所員進藤咲子氏（東京女子大学名誉教授）を講師として招き、「『文明論之概略』の草稿を調べる」というテーマでセミナーが行われた。『文明論之概略』の草稿と刊行本との詳細な比較研究により、草稿では主張がより過激で明確な表現であったものを、刊行本では福沢は、読者が適切に受入れられるように柔らかに書き換えている、など重要な諸点が実証的に示された。参加者との間にも活発な議論が展開された。

なお、このセミナーの要旨は、次号に掲載する予定である。

■ 『近代日本研究』第24巻刊行予定

『近代日本研究』は年刊を続けてきたが、2008年には、【慶應義塾創立150年、福沢研究センター開設25年】を記念して、3月に24巻、9月に25巻の2巻を刊行する。24巻に関しては、特集7本、研究ノート1本、講演録1本、資料紹介2本を収録。現在、年度内刊行を目指して編集集中である。25巻については、特集8本、投稿5本の予定で執筆が進んでいる。

■ 『慶應義塾150年史資料集』編纂の進捗状況

いよいよ、別巻1『慶應義塾史事典』の刊行が本年秋に迫り、同書の編纂に最も大きな力を注がなければならなくなっている。昨年9月から本年2月まで、同事典の編纂委員会は4回（25～28回）、別巻2『福澤諭吉事典』は5回（14～18回）であったが、原稿整理、校正、加筆修正など、センター所内で行われる作業は、圧倒的に『慶應義塾史事典』のものが多くなっている。しかし、『福澤諭吉事典』や『150年史資料集』本編も引き続き刊行をしなければならないので、担当を工夫して作業の継続性を保つようにしている。

■ 創立150年記念展・小泉信三展

2009年1月より東京国立博物館、福岡市立美術館、大阪市立美術館で「未来をひらく福沢諭吉」展（仮題）の巡回展が行われ、また同年8月には神奈川県立歴史博物館で「福沢諭吉と横浜・神奈川展」（仮題）が開催される。前者では7章の内6章を、また後者は全体に関して、ストーリーの作成や展示品選択を福沢研究センターが担当し作業を進めている。また、カタログ編集に関しても全面的に協力をしている。さらに、これとは別に、本年5月開催の小泉信三展に関しても、山内慶太所員（同展覧会企画推進小委員会委員長）・都倉武之所員が企画をささえる中心メンバーとして多くの時間を割いている。

■ ワークショップ

諸記録にあるように、若手の所員・調査員を中心に3本のワークショップが行われた。150年事業で多忙を極めている中ではあるが、近代日本研究の研究所として機能の健在を示すかのように、いずれも熱のこもった勉強会であった。

■ 図書検索システム完成

蔵書情報を遡及入力し、PC上で検索できるようにすることは、長年の課題であったが、図書担当等のこの数年の努力により、蔵書の図書検索システムが完成した。

■ 諸会議

- * 平成19年度第2回運営委員会（10月24日）
- * 平成19年度第2回センター会議（12月7日）
- * 『近代日本研究』編集委員会
第24巻第2回（9月28日）、第25巻（2月29日）
- * 『慶應義塾史事典』編纂委員会
第25回（9月25日）、第26回（11月12日）
第27回（1月23日）、第28回（2月28日）
- * 『福澤諭吉事典』編集委員会
第15回（10月5日）、第16回（11月14日）
第17回（12月19日）、第18回（1月29日）
- * 創立150年記念誌刊行委員会
第5回（11月7日）
- * 創立150年記念展覧会実行委員会
第2回（10月4日）、第3回（12月14日）
第4回（2月8日）
- * 「小泉信三博士展示会（仮称）」実行委員会（9月19日）
- * ワークショップ
「近代中日関係史における幾つかの問題点」
報告者：劉岳兵氏（中国南開大学日本研究院）（10月19日）
「近代知識人と社寺参詣慣習」
報告者：平山昇氏（東京大学大学院）
「慶應義塾における福沢諭吉の思想継承に関する一考察」
報告者：都倉武之（福沢研究センター）（11月3日）
「Wigmoreの比較法方法論」
報告者：吉田成利（福沢研究センター調査員）（12月14日）

■ 人事

- <専任所員>
新任 都倉 武之（専任講師） 10月1日～
- <事務局>
退職 勝又由紀子（事務嘱託） ～10月31日
矢島由実子（事務嘱託） ～10月31日
新任 田邊阿咲子（事務嘱託） 11月1日～

■ 展示会開催

- * 第173回福沢先生誕生記念会展示（1月10～11日：図書館旧館展示室）

■ 資料貸出・協力

- * 神奈川県知事松沢氏著書『破天荒力』の映画化に際し、図書を貸出し（9月18日）

■ 来往

- * 2007連合三田会実行委員細田仁氏来訪（9月4日）
- * 塾員早川喜久男氏来訪、資料を寄贈（9月20日）
- * 2008連合三田会実行委員南山宏之氏、福田育代氏来訪（9月21日）
- * PHP 研究所後藤淳一氏来訪（9月28日）
- * 塾員佐藤滋一氏来訪、資料を寄贈（10月5日）
- * 大東文化大学客員研究員、劉岳兵氏来訪（10月9日）
- * 文学部吉田恭子助教、オークションで購入した戦前野球部の写真を閲覧（10月10日）
- * 神津卓雄氏、資料複写（10月15日）
- * ソウル大学留学生李京美氏、通訳李洋秀氏（KBS TV）、資料調査（10月17日）
- * 応援指導部OB、嶽肩俊彦氏、資料調査（10月22日、11月14日）
- * 石井正恵氏（宮森麻太郎の関係者）来訪、資料を寄贈（10月31日）
- * 白井厚名誉教授来訪、資料を寄贈（11月5日、1月10日）
- * ダイキン工業への感謝状贈呈式に伴い、資料説明と演説館の案内（11月5日）
- * 国際基督教大学飛田良文氏、資料閲覧（11月12日）
- * 塾員愛宕通正氏、資料閲覧（11月14日）
- * NHK 藤賀大祐氏、落語家柳家花緑氏来訪、「知るを楽しむ」の番組収録（11月19日）
- * 奥山和由氏、映画「最後の早慶戦」の最終シナリオを持参（11月19日）
- * 弁論部OB会、資料閲覧（11月21日）
- * 塾員三橋寿恵子氏来訪、資料を寄贈（11月26日、2月5日）
- * 三越外商藤井孝則氏来訪（11月28日）
- * 和歌山県知事室文化国際課中村一人氏来訪（12月3日、14日）
- * 朝日新聞社後藤俊明氏来訪（12月26日）
- * 岸安彦氏（岸忠佐久氏の孫）ご夫妻来訪（1月8日）
- * David A. Dilworth 氏来訪、資料展示を見学（1月10日）

- * 朝日新聞大阪本社十河朋子氏来訪（1月10日）
- * 根津美術館西田宏子氏来訪（1月11日）
- * 若林英夫氏、弓術師範についての資料調査（1月18日）
- * 遠藤恵大氏来訪、資料を寄贈（1月21日）
- * 国際交流基金関西国際センター陳鳳川氏、慶應義塾別科留学生程静氏来訪（1月21日）
- * 三越法人外務部佐々木和夫氏来訪（1月23日）
- * NHK 植村康治氏来訪、「見える歴史」の取材（1月25日、2月25日）
- * 塾員山中博治氏来訪、学帽を寄贈（1月28日）
- * 小松英世氏、岡野喜之助氏来訪（1月29日）
- * 118三田会宮本敏之氏、国立印刷局永井宏明氏他2名来訪、銅版画を寄贈（1月31日）
- * 塾員肥田野淳氏来訪、戦時中の資料提供（2月6日）
- * 塾員富沢正明氏来訪、資料を寄贈（2月7日）
- * 安井裕二郎氏来訪、資料を寄贈（2月18日）
- * 教育評論社小山香里氏来訪、資料を寄贈（2月22日）
- * 塾員永峰真氏来訪（2月26日）

■ 出張・見学

- * 酒井事務長、赤堀係主任、全国大学史資料協議会2007年度総会・全国研究会に出席（10月11日：成蹊学園）
- * 小室所長、西沢准教授、都倉講師、記念展打ち合わせのため神奈川県立歴史博物館を訪問（10月17日）
- * 小室所長、早稲田大学大隈展示室開設式に出席（10月19日）
- * 都倉講師、記念展協力依頼のため早稲田大学（10月23日）
- * 西沢准教授、名古屋にて福沢書簡の調査（10月26日）
- * 梅垣理郎所員、福沢諭吉記念全国高等学校弁論大会の審査委員長として中津市（11月8日）
- * 西沢准教授、明治維新史学会にて「福沢諭吉の家族観～家業家産の視点から～」と題して報告（11月10日：中部大学名古屋キャンパス）
- * 西沢准教授、日清戦争をめぐる国際学術集会にて「福沢諭吉の朝鮮観～史料論をふまえて～」と題して報告（11月24日：韓国延世大学ウオンジュキャンパス）
- * 西沢准教授、都倉講師、甲原調査員、産経新聞調査資料部に調査（12月7日、21日）
- * 都倉講師、記念展打合せのため北海道帯広百年記念館（12月11～12日）
- * 小室所長、西沢准教授、都倉講師、記念展打合せのため日本郵船博物館および神奈川県立歴史博物館を訪問（12月19日）。
- * 西沢准教授、甲南大学で資料調査（12月20日）
- * 都倉講師、記念展打合せのため東京国立博物館（1月22日）
- * 都倉講師、小泉展打合せのため盛岡市先人記念館（2月7日）
- * 都倉講師、資料撮影のため靖国神社遊就館（2月12日）
- * 都倉講師、小泉展資料借用のため港区立御田小学校訪問（2月13日、18日、22日）
- * 都倉講師、小泉展資料借用のため（株）丸山園を訪問（2月14日）
- * 小室所長、西沢准教授、石井調査員、資料調査のため丸子町郷土博物館、シナノケンシ（株）絹糸紡績資料館（2月25日）

■ 講師派遣

- * 都倉事務局員、船橋三田会福沢精神研究会にて「福沢門下生と義塾社中の150年」と題して講演（9月8日：船橋勤労市民センター）
- * 西沢准教授、渋沢記念財団後援シンポジウム「大隈重信 福沢諭吉 渋沢栄一」にパネリストとして参加（9月9日：国際文化会館）
- * 岩谷副所長、三井物産社員研修会にて講演（9月16日：湯河原）
- * 西沢准教授、「奥平家と福沢諭吉」と題して講演（10月27日：長條城址史跡保存館）
- * 都倉講師、湘南藤沢高等部の学部説明会にて三田キャンパスの歴史を概説（12月13日：西校舎ホール）
- * 西沢准教授、東京雑学大学にて講義（1月17日）
- * 所員岩崎弘幼稚舎教諭、福沢旧邸保存会主催福沢先生108回忌法要時記念講演会にて講演（2月3日：中津）

■ その他

- * 『近代日本研究』20巻への電子公開を開始（11月～）
- * 塾員より指定寄付金100万円（12月21日）
- * 塾員より指定寄付金50万円（1月28日）
- * 篤志家より指定寄付金100万円（2月22日）

❖ スタッフ一覧

所 長	小室 正紀	経済学部教授	片岡 豊	白鷗大学教授
副 所 長	岩谷 十郎	法学部教授	我部 政男	山梨学院大学教授
	寺崎 修	同	川崎 勝	南山大学教授
	米山 光儀	教職課程センター教授	佐藤 正幸	山梨大学教授
所 員	池田 幸弘	経済学部教授	白井 堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授
(兼運営委員)	岩崎 弘	幼稚舎教諭	進藤 咲子	東京女子大学名誉教授
	梅垣 理郎	総合政策学部教授	曾野 洋	玉川大学准教授
	小野 修三	商学部教授	高木 不二	大妻女子大学短期大学部教授
	沢田 達男	理工学部教授	西田 毅	同志社大学名誉教授
	竹内 勤	医学部教授	浜野 潔	関西大学教授
	樽井 正義	文学部教授	平石 直昭	東京大学名誉教授
	林 温	同	平山 洋	静岡県立大学助教
	平野 隆	商学部教授	藤原 亮一	田園調布学園大学教授
所 員	山内 慶太	看護医療学部教授	堀 幸雄	
	有末 賢	法学部教授	前坊 洋	東北公益文科大学教授
	井奥 成彦	文学部教授	松沢 弘陽	
	牛島 利明	商学部教授	松田宏一郎	立教大学教授
	大久保忠宗	普通部教諭	宮村 治雄	成蹊大学教授
	太田 昭子	法学部教授	森川 英正	
	大塚 彰	志木高等学校教諭	山田 央子	青山学院大学准教授
	加藤 三明	幼稚舎長	林 宗元	韓国関東大校教授
	斎藤 暁子	女子高等学校教諭	Craig, Albert	ハーバード大学名誉教授
	都倉 武之	福沢研究センター 専任講師	Saucier, Marion	フランス国立東洋言語文化大学プロフェッショナルアグレジェ
	西沢 直子	福沢研究センター 准教授	Nguyen thi Hanh Thuc	ホーチミン市外国語情報科学大学講師
	藤田 弘夫	文学部教授		
顧 問	飯田 鼎	名誉教授	研究嘱託	山根 秋乃
	内山 秀夫	同		田中 康雄
	河北 展生	同		金 眞琬
	桑原 三郎	名誉教諭		巫 碧秀
	小泉 仰	名誉教授	事務局	酒井 明夫 事務長
	佐志 傳	元高等学校教諭		赤堀美和子 係主任
	坂井 達朗	名誉教授		神崎 慧子 嘱託
	中村 勝己	同		田邊阿咲子 同
	西川 俊作	同		佐藤 利加 派遣職員
	松崎 欣一	名誉教諭		石井寿美世 非常勤嘱託
客員所員	安西 敏三	甲南大学教授		吉岡 拓 同
	飯田 泰三	法政大学教授		
	井田 進也	大妻女子大学教授		
	區 建英	新潟国際情報大学教授		
	掛川トミ子	関西大学名誉教授		

他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、12名
(3月31日現在)

慶應義塾福沢研究センター通信 第8号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2008年3月31日 (年2回刊)
編集 慶應義塾福沢研究センター
発行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電話 03-5427-1603
<http://www.fmc.keio.ac.jp/>
印刷 (有) 梅沢印刷所